意味の構成からみた三軒協定の効果 －戸田市三軒協定の事例調査をもとに（その1）－

A STUDY OF SANGENKYOUTEI IN TERMS OF THE MEANING

太幡 英亮*, 西出 和彦**
Eisuke TABATA and Kazuhiko NISHIDE

Sangenkyoutei is the rare system that local government supports residents to make local scenery. On this system, residents using garden plants mainly to make good scenery. In this study, physical and psychological influences of *Sangenkyoutei* were analyzed on following 2 aspects.

- 1) Physical environment....The layout of the garden plants was inspected. And the section model of the local scenery was classified into some type.
- 2) Meaning.... By the narrative on resident's talking session, the meaning of the living environment (ex. Local scenery, Garden plants.) and activities (ex. Gardening) was analyzed.

Keywords: *Sangenkyoutei, Scenery, Garden Plants, Narrative, Meaning*

三軒協定, 景観, 植栽, 語り, 意味

1. 研究背景

1-1. はじめに

2002年に埼玉県戸田市の都市景観条例において施行された三軒協定制度は、隣どうし三軒以上で建築協定を締結した居住者に対し、その景観形成を市が助成する制度である。現時点では、各地区とも協定の実践行為として主に植栽活動を行っている。この協定は「隣三軒」を前提としている点で、「個人」による自主的な景観形成とも、「地域」の枠組みを重視した従来の景観条例・建築協定とも異なり、全国的に見ても極めて特殊な事例となっている。そこで、本論文ではまず研究背景として、従来のまちづくり・建築協定制度的に三軒協定を位置付け、その制度的可能性を予測する。次に、協定を通じて形成された物理的環境の調査やアンケート調査、三軒の居住者とのトーク・セッションを通じて居住環境や生活行為の意味を分析し、三軒協定の効果について考察を行う。

1-2. 三軒協定制度の概要

まず、三軒協定制度の概要について説明する。埼玉県戸田市が2001年12月に制定し、2002年7月1日に施行した都市景観条例のなかで、「コミュニティによる景観形成として、三軒以上の連続する方々による自主的な景観形成を応援する制度」（戸田市都市計画課⁽¹⁾）と定義されているのが「三軒協定」である。以下に、住民による三軒協定の締結から、市からの補助金の交付までの流れを4段階にまとめた。

①自らの景観形成に興味を持つ三軒以上の隣り合った住民や事業者が景観づくりの話し合いをし、花、緑、外構等の景観配慮に関する協定を締結する。その際、協定の名称や区域、目的等が示された協定書を作成し、市に申請する。

②市が、1.) 三軒以上で協定している 2.) 適正な実施運営が期待できる 3.) 公益上の支障がない 4.) 名称が定められている、という要件に基づいて認定を行う。

③協定者は協定に基づいて景観づくりを実施し、事業の完了を市に報告する。

④市が、報告に基づき補助金の確定、交付を行う。

2002年7月より、実際に三軒協定の認定が始まり、2002年度（初年度）に5地区、2003年度に5地区で計10地区31軒が認定を受けている（2004年4月調査時）。10地区のうち戸建て住宅が7件、タウンハウス型が1件、マンションが2件である。例として、戸建て住宅7地区のうち6地区の外観を図1に示す。三軒協定の実践には「建築物工事など」、「工作物改修など」、「花・苗木の植栽など」、という3つの協定区分があり、それぞれに対応して補助金の補助率及び限度額^(注1)が設定されている。調査時から2007年6月まで、協定区分は全地区とも「花・苗木の植栽など」であり、補助率2分の1で年間10万円以内、3年を限度に補助金が交付され、自主的な「植栽による景観形成」を目的とした協定が結ばれている。よって本研究の分析対象は「花・苗木の

本稿は、平成15・16年度日本建築学会大会学術講演梗概集で発表した「戸田市三軒協定の事例調査をもとに」に、加筆、修正を加えたものである。

* 東北文化学園大学科学技術学部住環境デザイン学科
助教・工博

** 東京大学工学系研究科建築学専攻 教授・工博

Assis. Prof., Dept. of Living-Environment Design, Faculty of Science and Technology,
Tohoku Bunka Gakuen Univ., Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

植栽など」による三軒協定に限ったものとなる。

図1 協定地区外観

1-3. 従来のまちづくり活動・建築協定の概要

次に、従来のまちづくり活動や建築協定と比較して三軒協定を位置付けるために、従来手法を以下の二つの側面から考察する。

まず一つに、それが「住民の合意形成」を目標とし、また課題としてきたという側面である。1970年代以降活発化した住民参加によるまちづくり活動の多くは、「まち」や「地域」といったある区域を対象に、そこに住む全住民を主体とし、その主体が計画目標を共有することを目指すものであった。こうした「合意形成の問題」を考察した建築・都市計画論文は多い。例えば、まちづくりワークショップにおける住民一人ひとりの意識の隔たりから、ワークショップが、地域の「全体性には強く作用しているものの、個人の意識や実践レベルへの訴求力は不十分である」という考察（白石ら⁽²⁾）や、住民発意型の建築協定では「住民の合意形成が困難な課題である」といった指摘（高橋ら⁽³⁾）がある。

もう一つは、それが物理的環境づくりというだけでなく「ひとづくり」として働いてきたという側面である。70年代から90年代に至るまちづくりの展開過程を考察した神戸・渡辺ら⁽⁶⁾は、まちづくりは「モノづくり」「仕組みづくり」のみでなく「ひとづくり」や「誇りづくり」等…幅広い概念に変化している」と述べている。また、住民参加のまちづくりを対象に多様な研究を行っている倉原ら⁽⁴⁾⁽⁵⁾は、まちづくりの変遷を捉える中で、「生活あるいは生き様を探り高める場としてまちづくりが実践されている」と考察し、住民参加のまちづくりが、都市マスタープランや公共建築の計画という都市計画手法としてだけでなく、地域住民の「学びの場」として働いたとしている。住民参加による主体的なまちづくりでは、そこへの参加・活動自体が意義となることも多く、それは創造的な「社会的活動」「余暇活動の場」とであると位置付けることもできよう。しかし、そうしたまちづくりの主体であり、調査対象ともなっているのは地域社会のリーダー達、即ち一部の活動的な人たちである事も多く、単に彼らの生き甲斐づくりである場合もあるのではないかな。

以上から、1970年代以降、社会の変化とともに展開してきた「まちづくり」は以下二点の特徴を持つと言えるだろう。一つは、「まち」という枠組みを重視し、地域の全体性と理想を大前提として地域住民の意識を統合していくなかで、「求心的に住環境を形成するまちづくり」という点。もう一つは能動的な社会活動への参加者による、「活発な住民の社会的活動・余暇活動としてのまちづくり」という点である。

1-4. 三軒協定制度の位置付け

以上に考察された、従来手法の二つの特徴をもとに、三軒協定の制度的特徴を位置付ける。まず、「求心的に住環境を形成するまちづくり」に対して三軒協定は、個人のつながりを重視し、三軒を前提として隣人という物理的に密接した関係から始まり「遠心的に住環境を形成する手法」としての可能性をもつと位置付けることができる。また、「活発な住民の社会的活動・余暇活動としてのまちづくり」の主体が地域のリーダーであったのに対し、三軒協定の主体は一般的な主婦であり（注2、それは「そこに住む市民の日常的な実践の場」としての可能性をもつと位置付けることができる。特に、その主体が、地域のリーダーなどの活発な男性である事と、ごく一般的な家庭の主婦である事の違いは大きいだろう。また、そうした日常的で身近な環境作りを援助する制度としての三軒協定は、従来の、施設の充足としての「ものづくり」や、地域の理想に向けた意識の統合としての「ひとづくり」に対し、個人々人にとっての身近な環境における「ものとひとの親密な関係づくり」として見ていく必要があるのではないかな。

2. 目的

以上に考察された「遠心的な環境形成」「日常的な実践」「モノとひとの親密な関係づくり」といった可能性をもつ三軒協定の有効性を明らかにしていくためには、居住者が協定の実践を通じて家族や三軒、近隣社会と関わりをもつ中で、作り上げられていく価値や意味に注目すべきであろう。理想としての価値観のもとに統合していく「まちづくり」でないからこそ、そうした居住者らの経験を通じた身近な意味の形成や共有にこそ、その制度的可能性が現れてくると考えられるためである。そこで、本研究では、そうした意味を読み解くための「意味の構成」を用いた分析手法を提案し、三軒協定の実践を通じて形成・共有される価値や意味の分析を行うことで、三軒協定制度の可能性と効果を明らかにすることを目的とする。

なお本研究は、三軒協定制度の位置づけや、現地観察、アンケート結果の報告に加え、意味の分析手法を提案して三軒協定の効果の一端を考察する本編と、本編で示した分析手法に基づいて、経時的な視点を加えて考察を深め、その効果を総合的に捉える次編の2編により構成される。

3. 調査・分析

本論の主要な調査・分析は、居住者との語り合いから環境や行為の「意味」を分析するものであるが、その前段階として、現地の表層調査や居住者の意識を捉えるアンケート調査を行った。

3-1. 植栽配置および表層の調査

調査方法 まず、三軒協定地区の植栽を含めた物理的な環境構成を客観的に把握するために、各協定地区の現地観察を行った。観察内容は、「建物配置」「植栽の配置」「表層」（注3「植栽の特徴」であった。なお、以下のいずれの調査も2003・2004年の、植栽活動が盛んになる4・5月を中心に継続的に行った。

結果 締結10地区の内7地区は、典型的な郊外型戸建て住宅であるため、ここではその7地区の表層を比較分析した。7地区とも僅かな外構部分にコンテナを用いて植栽を行っていたが、例えば、第1号地区は敷地境界に塀が無く、わずかに残された建物と敷地境界の隙間に植栽を施しており、第2号・第4号地区は敷地境界に塀があ

り、主に塀の外面に植栽を施すなどの違いが見られた。また、各地区の植栽もそれぞれ特徴を持っていた。ある地区では植栽の間にテラコッタの小人や小動物が沢山配置され、ある地区では花の色や配置に統一性をもたせていた。また別の地区では、統一性などは見られず、自由に無数のプランターが並べられていた。

それらの表層を、植栽行為を考慮した「塀・フェンスの有無」「土の有無」「外構の奥行き」の分類項を用いて分析したところ、計13タイプの表層類型を得ることができた(図2)。また、実際には各地区ともいくつかの表層タイプの組み合わせで構成されており、建物および植栽の配置と表層類型を例示したものが図3である。

全地区とも路地とは異なり不特定多数の人が往来する街路に面した緑化であり、主に塀やフェンスの外側に植栽され、また玄関周りには集中して植栽が施されていたことから、社会的で半公共的な植栽と言える。また、日当たりの関係だろうか、北側道路に面した協定地区は見られなかった。

		外構の奥行き 0.1m~1.0m	外構の奥行き 1.0m~	特殊な事例・組み合わせ
塀なし	土なし	A-1 	A-2 	
	土あり	As-1 	As-2 	
塀あり	土なし	W-1 	W-2 	W-1 + As-1
	土あり	Ws-1 	Ws-2 	
フェンスあり	土なし	F-1 	F-2 	
	土あり	Fs-1 	Fs-2 	

図2 表層類型

植栽配置	主な表層	表層の組み合わせ
第1号地区 		As-1 A-2 土As-1
第2号地区 		W-1 + As-1 As-1 Ws-2 F-1
第4号地区 		W-2 As-1 W-1

図3 植栽配置と表層の例

考察 半公共的な植栽としての表層が居住者やそれを取り巻く社会にとって具体的に何を意味するのかは、トーク・セッション調査で明らかにするが、こうした表層が示すのは、その街路を行き来する

「知らない人」との接合であり、またそうした外部の視線に積極的に関わっていく姿勢は「景観」との接合でもありと考えられる。

一方こうした表層は、近年では郊外型住宅に多く見られる一般的なものである。そうした一般的な住宅と今回調査した住宅の違いは、本調査の各地区が「三軒協定」を締結しているという点である。ここでの植栽による表出は少なくとも三軒以上に連続して現れ、また、背景には制度的な裏付けを持ち、居住者の中には「我々は三軒で景観作りを行っている」という意識が存在すると予想される。そうした、外来者から見たら「三軒並んでいる」という状況、居住者にとっては「三軒でやっている」という意識が、三軒協定地区の環境や行為の意味に影響を及ぼしていると予想される。制度的な裏付けについては、特に補助金制度の効果について、次のアンケート調査で明らかにする。

3-2. アンケート調査

調査方法 居住者と直接向かい合ってトーク・セッションを行う前段階として、2004年4月時点で協定を締結していた全10地区、計31軒の代表31人を対象に、三軒協定の実状を問うアンケート調査を行った。2002年度締結5地区は2003年4月に、2003年度締結5地区は2004年4月に配布・回収した。前例の無い制度であることから妥当な選択肢の設定が難しいため、回答方式は自由記述とした。主な質問項目は以下である。

- 現在の建物での居住年月(営業年月) / 協定締結年月日
- 三軒協定の情報入手先 / 協定締結の提案者
- 協定締結者同士の関係 / 協定締結を決めた理由
- 協定区分のうち「植栽」を選んだ理由 / 主な管理作業者
- 家族・三軒・地域の交流の変化 / 協定を締結して良かった点

結果 全地区の計29軒から得た回答をもとに、複数見られた記述内容を集計し統計的に処理した。そこから得られた主な結果を図4及び以下に示す。

情報の広がりとしては、現段階で三軒協定は広く市民に認知されていない。市の広報活動により認知し、隣人に紹介し、締結に至るという流れが分かった。協定区分のうち「植栽」を選んだ理由としては、「花が好き」「以前から(植栽を)やっていた」が多く、その他に「市の担当者の薦め」や「(その他の区分は)新築であるため必要ない/マンションなので出来ない/持ち家ではないので出来ない」等があげられ、現在まで協定区分が「植栽」のみである理由が窺えた。管理作業者としては、主に「妻」「母」があげられ、各家庭の主婦が中心となって協定を締結・維持していることが分かった。また、協定締結を決めた理由として「補助金制度」「景観美化の意識」

図4 アンケート結果(一部)(カッコ内は人数)

をあげた者が多く、締結してよかった点として「コミュニケーションの契機」「費用負担の軽減」が多くあげられた事から、補助金制度が、三軒での景観作りの普及や継続にとって重要な側面であることが分かり、交流の契機という点を含め本協定が持つ「景観の美化」以上の効果が読み取れた。また、家族・三軒・地域の交流の変化としては、「三軒の交流の増加」をあげた者が最も多かった事から、植栽が家族や地域の人以上に、三軒間の交流媒体として働いている事が窺えた（図4）。

考察 表層調査からも予想されたが、各家庭の主婦による日常的な実践としての植栽行為は三軒や近隣との交流を生み、植栽や関連した行為に様々な意味を付与していくと考えられる。そうした多くの他者との結びつきの様子は、次のトーク・セッションによって明らかにしていく。

また、協定の締結が、植栽を「やらねばならない」という責任感を刺激し、負担となるという意見や、逆にやりがい、高揚感を指摘する意見があった。同じ三軒協定による植栽であっても、それが居住者を幸せにしているか否かは、その状況をどう意味づけるかにかかっている。そこでは、いかに居住者にとって肯定的な意味が獲得されるかが重要となる。この点については、居住者主導の制度としての三軒協定の要点となると考えられるため、次のトーク・セッション調査でより詳しく見ていく。

さらに、アドバイザーが必要という意見があり、逆に自由にできて良いという意見もあった。「専門家による綺麗な植栽」と「仮に綺麗でなくとも自分の思い通りになる植栽」のどちらをどう評価するかであるが、三軒協定を遠心的環境形成手法としてみると、専門的な見地や一般的な価値基準からみて「美しい」ことも重要だが、居住者自身によって自己や三軒にとっての価値が形成されていくという可能性も重視すべきだろう。

3-3. トーク・セッション調査

調査方法 2003年の調査時にすでに一年近く協定を実践してきた、初年度締結5地区のうち、戸建て住宅において植栽による環境形成を行っている3地区（第1号地区・第2号地区・第4号地区）を対象とし、「自分たちにとっての三軒協定地区」をテーマとして語り合うトーク・セッション調査（注4）を行った。この調査は、調査員の質問に対し答えを求めるといった形式（指示的インタビュー調査）ではなく、居住者どうしの語り合い及び司会者（筆者）に対する語りかけの採取に重点を置いたものである。

セッションは2003年5月に各地区1回ずつ計3回行い、会場は市内の飲食店及び参加者宅であった。地区ごとに各戸代表1名ずつ計3名に集まってもらい、会話時間は約1時間30分であった。3地区のセッション参加者はいずれも協定の主な維持・管理者であり、専業主婦と会社勤めをする者が含まれたが、みな各家庭の主婦であった。自然な会話の展開を妨げる事の無いよう、司会者も、相槌や返答、質問によって会話に参加し、会話のきっかけとして幾つかの話題提供を行った。主な話題提供項目を以下に述べる。

締結に至る話し合い／ 実際の施行作業（プランターの設置等）維持作業（日常的作業等）／ 植栽を介したコミュニケーション自分たちの協定地区の住環境／ 植栽と関わる印象的な場面

分析方法 本研究での主要な分析は、トーク・セッションにより得られた会話から、居住者が、自身やその行為、他者や身の回りの環

境をいかに意味づけているかを明らかにする事である。よって、ここで採る方法は、例えば学校の授業場面の会話分析のように、「実生活のある場面で行われる会話の構造」から会話者どうしの社会的関係や規範に注目するというような、社会学的方法とは異なる。「セッティングされた状況において語られた内容」に注目し、隣人どうしと司会者の語り合いを、協定締結に付随して起きた様々な出来事を通じて自分や自分たちとその行為を意味づける行為（「語り」）として捉えるものであり、むしろ物語分析（注5）の様な心理学的手法と言える。こうした「語り」に注目した分析視点は建築研究分野では少ないが、倉原ら（6）が、まちづくり参加者の「語り」とそこから明らかになるまちづくりの意義について考察しており興味深い。しかしそこで語っているのはまちづくりのリーダーたちであり、また「語り合い」（注6）を対象とした研究はほとんど無い。「語り」とは異なり「語り合い」とは共同行為であるため、「共有された意味」や「そこで共有されていく意味」が現れ、三軒にとっての意味の生成過程とも見ることができると考えられる。

一方植栽や植栽行為の「意味」に注目した研究として、厳ら（9）は、シルバーハウジングにおける高齢者の、外部空間への働きかけを観察調査し、「菜園づくり」の効果に注目している。そこでの菜園づくりは、「高齢者の生き甲斐として楽しみに満ちた行為」であり「高齢者を外部に誘引しつつ他者との偶発的な出合いの機会となり「井戸端会議」等の交流稼働に発展する」と考察している。本研究も、居住者の実践により経験的に生み出される環境の意味（注7）に加え、環境と結びついた「行為の意味」に注目していくものである。

具体的には、セッションの録音を書き起こした会話文から、花や庭木といった植栽・家の前の道や川・隣の公園・近隣の家などの「環境」や、私・三軒・主人・散歩の老人などの「主体」（自己と他者）、また、植栽行為・協定の締結をはじめとした多くの「行為」を抽出し、それらの関係から環境や行為の意味の構成を記述し分析する方法を採った。

結果 本編では、分析を行った3回のセッションのうちの1回の結果から、「環境の意味」と「行為の意味」それぞれの構成の例を挙げ説明する。なお、図5左の記号S・V・0は、それぞれ主体・行為・環境を示し、会話文中のそれらの関係を「環境」を中心にまとめたものが図5右である。なお、会話例の番号は矢印の番号と対応している。環境の意味 植栽を含めた「環境」は、それと関わる主体やその行為との結びつきの中で意味をもつと考えられる。そこで、会話文の中の「環境」の表現に注目し、「主体－行為－環境」の関係（環境の意味の構成）を抽出することで、「環境の意味」を分析した。

例えば、図5左の会話例3から、「こっち（家の前の道）」という環境は、「（散歩の）皆さん・おじいちゃん」といった主体が「ルートを選んで」通る散歩コースとしての意味を持っていた。この場合の意味の構成は「散歩の皆さん－コースを選ぶ－家の前の道」として記述した（図5右の矢印3）。その他にも、「家の前の道」は、掃き掃除の場所として語られるとともに、ガーデニングをしている方ならば常にきれいにしている場所として、また、保育園児の散歩道としてなど、多様な意味を持っていた。また、「植栽」は、散歩の老人や園児など多くの人が眺める対象であり、同時に私・母・夫による様々な植栽行為の対象であった。

このように、三軒を取り巻く環境は、それに付随した多様な行為

のもとに多くの意味を獲得していたと言える。

行為の意味 自己やその行為が意味を獲得する条件を、自分が「自分自身とは別の何か（誰か）に向かって関わることである（注8）」とする考えに基づき、会話に現れる「他者」の表現に注目した。その上で、「主体－行為－環境－行為－他者」の関係（行為の意味の構成）を抽出することで「自己やその行為の意味」を分析した。またそのとき植栽などの「環境」は、その関わりの媒体（注9）として働く。

例えば、図5左の会話例2から、「B（私）」という主体の植栽行為は、

それを「楽しみに（期待）」する「散歩されるおばあちゃん」などとののかかわりの中で意味を獲得していた。この場合の意味の構成は「私－植栽行為－植栽－期待する－散歩なさる老人」として記述した（図5右の矢印2）。その他にも、植栽が声をかけてくれる人々、周りの（近所の）方や隣人など、それを気にかける人との関わりのなかに置かれることで、「私」や「三軒」の「植栽行為」が意味を獲得していた（図5の会話例1）。また、そうして「植栽行為」が意味を獲得するだけでなく、例えば保母が園児との散歩の途中でこの植栽とふ

会話例1：刺激としての周りの（近所の）方の植栽行為	
B：まだ今の状態は、進行中だから、まだこれからどんどん変わっていくと思うし、周りの街並みもまた変わっていけば。 A：結構刺激は受けますよね。 C：そうですね。 B：うん。周りも最近ね、結構綺麗になさってますよ、皆さん。 A：それを見てね、いいなと思ったら自分の所にもね、そういう感じで取り入れたいなと思うね。	
S1 (O：植栽) S2 (V1：植栽行為)	
会話例2：おばあちゃんの期待に応えようとする植栽行為	
B：二鉢位ずっとそのまま置いていたのがあって、何にしようと思って考えていたんです。そしたらあの、散歩なさるおばあちゃんが、「今度ここに何が植わるのかすごく楽しみにしてるんです。」とか言われると、プレッシャーがかかる。ははは。 全：はははは。 司：おもしろいですね。 B：それはありますね。「次何かしら」って言われちゃうんで。 司：あー。 C：やっぱり、散歩される方とかよく見てますよね。	
S2 (V2) (V1：植栽行為) (O：植栽)	
会話例3：お年寄りの散歩コースとしての家の前の道	
B：何か、バラのすごくある所あるじゃないですか。あそこも皆さん散歩コースにして。 C：あそこ回ってこよう。 B：回ってこっちにいらっしゃるんで。 司：なるほど。散歩なさってるおじいちゃんとかおばあちゃんも、もしかしたらそういうルートを選んでものかもしれないですね。 C：なにかそうそう。 A：選んでも中にはいらっしゃいますね。はい。	
S1 (O：家の前の道) V1	
会話例4：保母と園児の散歩中の話題としての植栽	
C：そう、昼間はね、保育園の子供たちがね、よくあそこの道を散歩コースで。 A：司：あー。 C：ね。公園ぐるっと散歩コース。 C：で、よく家の前の花の所でね、保母さんが「きれいねー」とか。	
S2 (V2：見る) S1 (V1)	
会話例5：隣人との協力による夏場の水やり	
A：水やりは大変ですね。これからが大変です。夏は特に。 B：二回 司：一日二回 A：やらないとだめな時もありますよ。 司：お仕事なさってるのに。 B：考えておく。 A：朝、夜。朝、夜。 C：夏、何日か家族で出かけたりする時はね、声掛ける事もあるんですよ。えー。やっぱり夏はまめにあげないといけないので。 司：声を掛け合いながら。 A：まいときますよって。 B：私たちの場所って道路幅も広いですし、まん前が公園なのですごく夏は日当たりが良すぎるし。	
S1 (O：植栽) S2 (V2)	
会話例6：「お互い様」としての近隣の掃除	
B：うちも角のあの道越して行きますからね。たまにこう、あのゴミ絶対うちに来るなって思っ 司：ははは。 A：あっちの駐車場のゴミが来るんですよ。 全：ははは。 司：駐車場ありますよね、あそこから来るんですか？ C：来ます。結構来ますよね。 B：あそこの道路の、草むしった後そのまま置いてらっしゃるんですよ、風とかあるとね。だけど、毎朝お掃除して下さる方いらっしゃるんで、だからまあお互い様で。 A：まあ、そうですね。 B：お早うございますとか、声掛けながら。	
S1 (V1・V2：掃き掃除) S2	

主体	行為	環境（媒体）	行為	主体
S	V	O	V	S
私	ガーデニング	この場所・地域	安心して歩く	みんな
	引越越し		外にいる	お年寄り
	犬の散歩		一人で歩く	地域の方
私たち	ガーデニング	街の景観・街並	気にとめる	他者
	つながる		三軒協定	市
家		公園の周り	きれいにする	早起きのおばあちゃん
		庭とか垣根・バラのあるところ	散歩	おじいちゃん・年輩の方
		家の前の道	散歩	保育園の子たち
私	掃き掃除	家の前の道	きれいにする	ガーデニング
	掃き掃除		コースを選ぶ	やっつけっしやる方
私	きれいにする	家の周り・反対側	コースを選ぶ	散歩の皆さん
三軒	水やり	私たちの場所	新築	同じ工務店
主人	芝刈り	庭	集まる	鳥
三軒	植栽行為	植栽・花	声をかける	全然知らない方
	手入れ		お話ししている	散歩なさる老人・年輩の方
私	植栽行為	2	期待する	ゲートボールの老人
	手伝い		声を掛ける	
赤の彩りを優先する	長持ちするものを考える	4	見る	父と同じくらい
			声をかけてくれた	
増やす	ガーデニング	1	きれいねー	保母さん
			見る	
作業	声かける	1	植栽を考える	保育園の子たち
			植栽行為	
買い物	買ってきて植える	5	植栽行為	周りの方
			見る	
水やり	つみ取り	5	援助	Dさん
			アドバイス	
色などを見る	参考にする	5	三軒協定	市・市の職員
			見る	
母	植栽行為	5	毎日掃除してくださる方	お婆ちゃん
主人	水やり	5	毎日掃除してくださる方	お婆ちゃん
隣	煉瓦運び	5	毎日掃除してくださる方	お婆ちゃん
水まき	植栽行為	5	毎日掃除してくださる方	お婆ちゃん
夏の水やり		5	毎日掃除してくださる方	お婆ちゃん
私	掃き掃除	ゴミ・落ち葉・花びら	掃き掃除	毎日掃除してくださる方

図5 左：会話例 右：意味の構成の例（会話例と矢印の番号が対応）

れあうことで、この「散歩」に一つの意味が付与されていた（図5の会話例4）。一方「植栽行為」は、植栽が市の援助のもとに置かれることで「すごくやらなきゃならない」という意味を帯びたが、それに対応して「植えとけばいいのよ」という居住者による肯定的な意味の生成も見られた。さらには、植栽が媒体となって「夏場の水遣り」や、「秋の落ち葉拾い」を通じた交流が生まれていた（図5の会話例5・6）。

このように、特に「植栽行為」は、植栽が媒介する様々な他者との関わりのもとに、多くの意味を獲得し、また他者の行為にも意味を与えるものであった。

考察 以上のような意味の構成にみられた特徴として、一つは、社会的に様々に意味づけられた環境の中で、それに対応するかたちで自分や自分たちにとっての意味づけが為されていたことである。即ち、他者の援助や期待、批判のなかで、自分たちなりに行為や環境を意味づけていた。ここから、意味づけとは社会的に様々に意味を持つ世界に自己を肯定的に位置づける行為であるとも捉えられる。

二つ目には、「環境」が、それに関わる多くの主体と行為の中で多層的な意味を持っていたというだけでなく、環境を媒体として、「行為」自体が意味を獲得していた点である。老人の散歩は私の植栽行為に意味を与え、私の植栽行為は、老人の散歩に意味を与えていた。このように、居住環境の媒体としての働きにより居住者の日常行為自体が意味を獲得したという点は重要であろう。

以上二点を踏まえ、三軒協定の有効性について考察すると、まず「隣三軒」という身近な他者との関わりの中に植栽がおかれたことで、植栽は多くの意味を獲得し、またそれは共有されていた。同時に、「市」や「散歩のおじさん」といった三軒にとっての他者との対比の中で「三軒の植栽（私たちの植栽）」としての意味を獲得し、植栽行為も景観づくりとしての意味を獲得していた（図6）。即ち、「三軒」というまとまりは、単に個人の植栽では獲得し得ない多様な意味を獲得する上での、原動力となったと言える。「三軒」という単位は、居住者が主体的に身近な環境作りを協働しうる程度に小さいものの、景観としても、また意味の上でも集合体（注10）を形成しうる程度の大きさであったとも考えられる。表層調査やアンケート調査の結果からも、植栽の多くの他者との交流媒体としての働きが考察されていたが、三軒協定の、この日常的な行為の意味を導くという点は、「モノとヒトの親密な関係づくり」として、生活に根ざした豊かな「意味」を伴う景観の形成手法として評価できるのではないかな。

図6 三軒内外の結びつき

4. まとめと課題

三軒協定の有効性は、以上のような居住者による意味の生成・共有の中に見ることができた。この制度は、「三軒」という前提によって植栽を隣人との関わりの中に置くことで、その他の多くの他者との関わりを導いた。従って、三軒協定における植栽は、景観美化の効果以上に、多様な意味生成の原動力となることで、自己を定位する世界としての住環境の意味を豊かにし、居住者の生活に貢献していたと言えることができるだろう。

一方、様々な意味を生み出す三軒の植栽行為が、いかに肯定的に意味づけられるかが重要となると考えられたが、場合によっては重圧になり否定的意味も帯びる協定の実践を、より有意義で価値あるものにしていけるような物語の提供や、物語の補強といった役割（注11）も求められるのではないかな。

また本研究では、「植栽」による三軒協定について考察されたが、「三軒協定」の効果を総合的に論及するためには、他の協定区分である「建築物工事等」「工作物改修等」を無視できないため、ここで、それらの区分で協定が結ばれたときの制度的可能性を予測しておく。建築物や工作物の場合、手軽には作れず、日常的に手を加えにくく、伝播の可能性も少ないと考えられる。しかし、「植栽」と同じ居住者主体の「環境構築行為」として捉えた場合、居住環境や行為の意味を豊かにする同様の効果も予測できるため（注12、今後これらの協定区分が選ばれることを期待したい）。

以上、本編では、三軒協定制度の位置づけや、2003年のトーク・セッションのうち1地区の結果をもとに意味の分析手法の提案を行い、三軒協定の有効性の一端を考察した。次編では、本編で示した分析手法に基づいて、2004年のトーク・セッションの結果とあわせて各地区各年度の比較分析や、表層類型とコミュニケーションのあり方の相互関係等について考察を行い、経時的な視点を加えた「遠心的な環境形成手法」としての三軒協定の効果を考察することを課題とする。

注

- 注1) 建築物の外壁塗装、修繕工事等の「建築物工事など」には補助率2分の1で限度額50万円。門、塀、柵、花壇等の築造、改造等「工作物改修など」には補助率2分の1で限度額30万円が交付される。
- 注2) 調査前に行った戸田市担当者へのヒアリングにより、協定締結者のほとんどが女性であり、一般家庭の主婦であることについては把握されていた。なお、後のアンケート調査で実際の管理作業者が定量的に把握された。
- 注3) 大野（7）により「表層」は、道と建物、板塀や鉢植え、洗濯物を含めた「道際におかれた諸要素の複合全体」と定義されている。
- 注4) 本調査は、実生活の社会的場面における会話の採取ではなく、また調査員による指示面接形式の聞き取り調査でもない。その中間的な、「トーク・セッション」という設定された場における会話（居住者どうしの語り合いと第三者への語りかけ）を採取するものである。
- 注5) 物語分析は主にライフヒストリー研究で用いられる方法であるが、例えば、やまだ（8）は「私たちは、外在化された行動（behavior）や事件の総和として存在しているのではなく、一瞬ごとに変化する日々の行動を構成し、秩序づけ、「経験」として組織し、それを意味づけながら生きています」と述べ、そうした「組織し、意味づける行為」としての物語に注目している。本研究ではその様に、「自己を位置付け意味づける話し」を「語り」としている。
- 注6) 心理学分野では、呉（10）らによって、個人の「語り」だけでなく、集団の「語り」について分析した研究も行われている。呉は、故郷とともに

する人々による「原風景」の語りを分析しているが、原風景を共同で語ることは「同じ地域の場所・空間・風景と関係する多様な人、遊び、出来事が交わりながら、共同でストーリーを構築し、そして共同認識し、共同で評価し、意味づけていく、語り合う場での共同の物語生成作業である」としている。

注7) 「もの」の経験的な意味に注目したものとして、古賀ら⁽¹¹⁾は、高齢者居住施設での観察と聞き取り調査により、高齢者をとりまく環境に馴染みのある「もの」が持ち込まれることの重要性を示し、「痴呆性高齢者に限らず居住施設の居室内の「もの」の環境はそれらと関わる環境行動を誘発する可能性を持つために、住まい手の生活の質に直接むすびつくという大きな意味をもつ」とまとめている。また古賀らは、Csikszentmihalyi & Rocherg-Haltonによる物の分類、「行為対象／鑑賞対象」を用いているが、これは、C・Aルイス⁽¹²⁾による、植物への「観察」と「参加」という2つの異なる関わり方の分類とほぼ同義と考えられる。植栽は、「行為対象」であり同時に「観察対象」でもあると言え、またどちらも重要な側面である。

注8) Flankl, V. E. ⁽¹³⁾は、人間が意味を獲得するということが、「人間であることが常に、自分自身とは別の何か、自分自身とは違う誰かに向かって存在する（関わる）ことだという、根元的な人間的事実」であると述べている。

注9) 分析結果で示した「環境の意味」の構成である「おじいさん- 散歩- 家の前の道」や「子供- 遊び- 家の前の道」という構成を、「家の前の道」を媒体として組み合わせると「子供- 遊び- 家の前の道- 散歩- おじいさん」という構成となり「行為と意味」の構成を獲得する。これは分析結果から「行為の意味」の構成として例示した「自己- 植栽行為- 植栽- 散歩- おじいさん」と同様の構成であり、老人は子供の遊びを眺めるために散歩できるし、子供は遊びのなかで老人との遭遇を楽しむかもしれない。この様に、環境がもつ「媒体」としての働きにより、その環境と関わる行為は様々な意味を持ちうる。

注10) 集合体については、太幡ら⁽¹⁴⁾により「街の広がりの中で一つのまとまりとして認識された建築群」として定義され、集合体を構成する個々の空間要素や建築物の持続的変容について考察されている。

注11) こうした問題意識に基づく研究手法の例として、「アクションリサーチ」という手法は、研究者が意識的に対象者の意味生成に参与し、その現状を改善していこうとするものであり、そこでは研究者は、客観的傍観者としての立場を捨てている。本研究でも、語り合いの中で研究者が、居住者の意味生成に影響を与えていることは明らかだが、こうした研究手法の効果を見極め、状況に合わせて活用していくことも有効だろう。

注12) 例えば、協定締結を機に3軒の塀の色を統一し、3年おきにペンキが塗り替えられるというような長期的な視点で考えたとき、その環境は居住者にとって豊かな意味を持ち、また多くの行為を誘発すると予想することができる。補助金交付は3年間という規定があるものの、協定制度はそのきっかけとなると考えられる。なお、植栽以外の協定区分が選ばれない理由については、2007年までの経過を踏まえ次編において考察する。

参考文献

- 1) 戸田市都市計画課:戸田市都市景観条例のあらまし, 2002
- 2) 白石昌之・横山俊祐・武藤剛:住環境整備事業からまちづくり活動への漸進的展開にみるワークショップの課題, 日本建築学会計画系論文集第536号, pp. 199-206, 2000. 10
- 3) 高橋昭子・梶浦恒男:住民発意型建築協定の特性と協定締結の阻害要因, 日本建築学会計画系論文集第494号, pp. 187-193, 1997. 4
- 4) 倉原宗孝・日景敏也他:主体の生活史や生活世界からみたまちづくりの意識に関する考察(その1)(その2), 日本建築学会大会梗概集, F-1, pp. 591-594, 1996. 7
- 5) 倉原宗孝:市民的まちづくり学習としての住民参加ワークショップに関する考察, 日本建築学会計画系論文集第520号, pp. 255-262, 1999. 6
- 6) 神戸大介・伊藤史子・渡辺俊一:都市計画分野における「まちづくり」の展開過程, 日本建築学会大会梗概集, F-1, pp. 167-168, 1998. 7
- 7) 横文彦・大野秀俊他:見えがくれする都市, 鹿島出版, 1980
- 8) やまだようこ編著:人生を物語る, ミネルヴァ書房, 2000

- 9) 巖平・福田由美子他:シルバーハウジングにおける外部空間への働きかけや使われ方と意味, 日本建築学会大会梗概集, E-2, pp323-324, 1997. 7
- 10) 呉宣児・南博文:語りから見る原風景(3)-共同の語り・共同の原風景-, 九州大学心理学研究第3巻, 2002
- 11) 古賀紀江・高橋鷹志他:環境移行における「もの」の意味に関する研究, 日本建築学会計画系論文集第551号, pp. 123-127, 2002. 1
- 12) C. A. ルイス:庭づくりは癒しの行為, M. フランシス・R. T. ヘスター共編「庭の意味論」, 佐々木葉二・吉田鐵也共訳, 鹿島出版会, 1996
- 13) V・E・フランクル:〈生きる意味〉を求めて, 諸富祥彦ほか訳, 春秋社, 1999
- 14) 太幡英亮・西出和彦:原宿における建築集合体の形態・構成要素・心理評価の分析, 日本建築学会計画系論文集第620号, pp. 89-94, 2007. 10

(2007年10月10日原稿受理, 2008年4月11日採用決定)